

## ロスアンゼルス身辺雑記

国立公衆衛生院 前田 信雄

### I

私は、世界保健機関の研修ということで、カリフォルニア大学・公衆衛生学院に1年滞在してきた。こういった経験は珍しいものではなく、文部省でもあるいは諸々の奨学生制度でもずい分多くの人を1年間アメリカにおくりだしている。私のばあい、特色あることといえば、家族連れだったことと、社会保障と医療の研究・実情見聞ができたことになろうか。ロスアンゼルスでの身辺事を通して、留学生活のあれこれのことを断片的に書くことにする。

1年間居るとなると、まず住むところが問題、その家探しにはだいぶ苦労した。6月末か8月末には空家が多いが、12月という時期は転勤時期ではないので、方々自動車アパートを探してみたが、vacancyのサインのところのみつからない。空きがあっても、猫、子どもはおことわりとくる。子どもは動物と同じ扱いというわけではないが、要するに、はねまわり大声を出すのでいやがられるだけ。有色人種だということで貸すのをことわることは建前上は禁じられているので、そういう面での障害はないものの、いいなと思うところは400ドル(月・12万円位)と高家賃だったりする。仕様がなく、大学新聞に広告をだしてみた。“当方交換研究員・家具付一軒家求む”といったような内容をのせた(1ドルと少しの広告料)。無料で学生・職員の殆どみんなの手に渡りよく読まれる新聞なのに、反応はさっぱり。一つだけ積極的な電話応待があってその家に行ってみたが、2寝室で400ドル。居間・食堂広く家具一切付き、プールもあり(但し小さなもの)、という熱心なすすめだったが、高い家賃のわりには狭い間どりなので遠慮申し上げる。しかし縁は奇なもので、このお話しにからんで、家内が大学に勤めている日本人教授夫人らと知り合いになり、

後に大変お世話になることになった。あれこれしているうち、結局大学の宿舍あっせん部のような所で、サバーティカル(7年勤務後1年間の休暇をもらえる制度)でバリにいく同じ大学の先生の家が見つかった。丁度私達の借りたい時期と合っていたし、値段も300ドルとまあまあ線の。実は12月の前3カ月間は、同じく300ドルで、私の指導教授の家を借り、かつ留守番みたいなことをして、そのときの値段とも同じ家賃。東京ほどではないが、向うも家賃は高くなるいっぽう。家具つかずの所は安いけど、部屋のなかは本当にガラソウで、カーテンから下手するといすや毛布、ちょっとした鍋・釜の果てまで買わなければならないこともある。1年ぐらいの滞在だと、とてもわざわざ買って後で二東三文でおいてくる気はしない。やはり家具付に限るということになる。家具付きといってもケースごとちがうが、私のばあい、幸いに、ステレオはとりはずしていったことを除いてあとは全部、タオルからシーツ、スライドプロジェクター、台所用品一切を借りることができた。敷金のようなものはドルあとで返却。

### II

ロスアンゼルスは本当にだだっ広い街。千葉・東京・神奈川に匹敵するような広さの土地に地下鉄・鉄道(人を運ぶ)はなく、発達した自動車道を利用するしかない。バス路線は限られ、子どもの学校へは下手すると1時間半もかかってしまう不便さ(車で15分)。そこで次の問題は車をどうやって買うか、である。日本では、3年乗って未だ2万キロのスバル1100を13万円ほどで手離していったからというわけではないが、どうせ9カ月しか乗らないだろうと思い、予算は500ドル(15万円)前後とたててみた。まず、新聞(大学のロスアンゼルス・タイムズと地域新聞)をみて電話、個人のところやディーラーに出かけてみるが、安ければ悪く、良ければ値段が高く、こっちの希望の小型車は石油危機もあってなかなかみつからない。しかし、このときの新聞での探索は、あとで売るときに役立つ。結局、知りあいの日本人から、古い大型車(1965年型)をゆずってもらうことになった。買った値段以上に修理費のかかる車で参ったが、わりと良い値で売れたので、これまた結果的には良い線を行ったところ。

しばらく国際免許だけで乗っている日本からきた先生もいたが、1年いるときは免許証そのものが身分証明書になるので、やはり向うの免許をとるべきである。道路交通法をおぼえる意味でも……。職場の同僚からテキストを借り、試験問題集（薄いパンフ・「構造」なし）と一夜漬けでとりくむ。こちらが用意した車で、30分ばかり練習したあとすぐ路上運転で試験。日本人の教習所教師に指導してもらったのだが、“あんたしばらく運転してなかったね”とおこられる始末。いきなり慣れない車で右側通行はやはり非常にとまどうのは当然。おかげで法規も頭に入り、実地試験も心臓で？何なくパス。それでもその後2度ほど反対車線（左）に入る失敗をした。アメリカでレンタカーでも借りて運転してみたいという希望の方にドライバーとして最も気をつけるべきことを少し書かしてもらおうと、第一にゆったりした車間距離をとること。高速で走り、もし追突したばあいまず責任は全部こちらにありと考えるべきだから。前にわりこみで入られても気にしない。次は車線をかえるときは必ずウinkerを出し、首をまわしてわきを確認してからハンドルを切ること。車を買った時点から即刻保険に入ること（電話でも可能）。万が一の事故に備えるため、レンタカーでも私は保険に入った。

### Ⅲ

4人で1年間滞在となると、だれかが病気にかかる確率がやや高くなる。外用薬などは向うで買えるから問題はそうないが、万が一の入院に備えて大学の健康保険に加入した。日本でも共済組合の掛金はとられているので、奇妙な二重拠出を余儀なくさせられたわけだが、向うでそれを言い出しても仕様がな。年間家族4人で約250ドル（日本円で7万円ほど）。しかも一時払いなのでかなりの重い負担である。入院を中心の給付ポリシーをえらんだので、唯一の受診であった子どもの歯科診療の際、これは全く役立たなかった。結局、「無受診世帯」として保険料掛捨てになるが、いわば「無病世帯」だったことの方を評価せねばなるまい。

外国生活上最大の難関であるコトバの問題についても様々の試みと結果を経験したが、結論としては、米語を話す上達度は必ずしも各人の努力と比例しない、という変なことになる。小学校1年生の下の子は、ロスアンゼルスに着いた翌々日から近くの公立学校に入った。一番先に聞かれたのは *What's your name?* だったと、後で語るのであるが、その日は全く一切のことが、わからず、しゃべらず帰宅。日本で米語教育は皆無。この子が英語の寝言をいうようになったのは3カ月後。身体でおぼえるともいうべきか。学校以外特別の米語教育は全くなし。その子が、隣り近所の子らとも、こちらにはわからないロスアンゼルスっ子の俗語を使って遊びに余念がない。この子にくらべ父親の方は、積極的にコースもと取り、同僚と議論し、新聞を三種類も読み、テレビ・ニュースも欠かさないように聞けども、その上達度はさっぱり。“*ダデイ！アールはあまり気にしないでウルールー……と発言すればよいよ*”なんて子どもから“助言”される始末。親父のコトバ上の頼りがいが家の中でいくらか証明されるのは、下水がつまった時の修理依頼（電話）とか、職場の同僚から聞いたおいしくて安い食物の入手方法の知識とか、日本からもっていったカラー・スライドの説明（たいてい自宅でのパーティで）のときぐらいのものである。米語のなぞなぞ（*riddles*）で“答え役”はたいてい親の方で、もっぱらひやかされるだけ。中学2年の上の子も普通の公立学校に入る。こっちは「語学上のハンデ」ということで、「社会」そして大好きな「理科」の選択を許してもらえなかった。頼みに頼んで選択できた「数学」は、始めはコトバでさんざん苦勞したらしいが、途中からは親父からの援助をわずらわさなくなった。「数学」の内容は、たとえば「1年前に500ドル借金、月5%の利子、6カ月後350ドル返還、元利とも今何ドル借金しているか」といった極めて実用的なもの。ところが、中学のサマー・スクールでは、*Computer Mathematics* を選択。家でも夢中になってプログラム書きなどにうちこむ変りよう。この子のケースも、興味につられて自然にコトバが身についたというところであろうか。

## IV

私のいた大学はすべての点で開放的な大学で、授業も教師と学生間の質問・討論が盛んであった。これと、教授とのアポイントメントをとっての1時間ほどの1対1での話しあいはとても有益。自分でアポイントメントをとり方々を見学するのも、時間はかかるし気を使うことなのだが、だれかからおぜん立てをしてもらうことをしないほうが、要領もおぼえるしコトバも慣れる。オフィスでの電話の授受はコトバの練習だけでなく、すべての用事を効率的にするし、アメリカ人とのコミュニケーションの重要な手段である。文献のことを図書館に聞くことから、前にも書いた広告掲載のこと、旅先でのモーテルの予約・確認まで、電話の便利さをできるだけ活用した。もっとも、私のオフィスの電話番号はある大きなピアノ会社と同じで、そこが出すテレビ広告の後ジャンジャンかかってきて参ったが……。 「お前はチャイニーズか」なんて余計なことをきく人までいた（地域番号違い）。

文献の貸し借りも研究生活上の基本的なことであるが、自己流の借用書をゼロックスでつくり、なるべく早く読んで帰すことにした。ときには山ほどの文献を前にして大変なときもあるが、「ツンドク」のはかの国でも余り好まれない。私のばあい「貸す」方は少なかったが、これには、日本でやっている私の「図書貸出簿」の英語版はつくらずじまいだった。但し、私よりももっと組織的に、学生貸出用論文を用意し、秘書がその一切を管理するという教授がいて、「さすが」と感心させられるとともに、それを通して学生の関心を知り、かつ勉強をプッシュするうまい方法とみうけられた（既に医師などの資格ある卒業後学生）。

本の購入は、こちらのように、丸善にハガキを出せば配達、まとめて後払い、というわけにはいかない。大学の購買部に申込む方法と、あとはチェック同封の上郵便注文という方法の二つがある。前者は1カ月近くの日数がかかるが「見計り」が可能（多少の交渉技術が必要）。後者は自分で手紙を書かねばならないが2週間もかからないで入手可能。しかし、市販されているものでも、「こちらは

コレコレの研究者、貴方の本は研究上大変有意義、寄贈されれば幸甚……」てな意味のことを書いてやると（公文書的な少しかたくるしいもの）、ちゃんとタダで寄贈してくれることもある。政府・行政関係のものはその点殆ど無料なので、ハガキ申し込みもきくようである。

## V

いま米国は全国民対象の「国の健康保険」法をめぐる論議が盛んである。医療費だけ投じてもその効果はあまり上っていないじゃないか。医療の質そのものを評価するハカリのようなものを工夫しなければならない。もっと入院外と予防に力を入れなければ……。 「アメリカ医療は危機そのもの」いや「医療をうける不公平があるだけ」といった議論の洪水のただ中の一年間だった。たくさん勉強すべきことのなかでは、この一年間は短か過ぎ、生活もまた小さな工夫と享受を実現したにとどまったという実感である。

(1974・10・6)

